

キャッシュON! リアルタイム高性能の世界をのぞく

実験リサーチ! Linuxなし

## Cortex-A9 プロセッサの実力

第4回 命令/データ・キャッシュを有効にする

中森 章

なんて  
男らしい!

リスト1 命令キャッシュとデータ・キャッシュをONにする

```

.text
mov r0,#0
mcr p15,0,r0,c7,c5,0      /* icache invalidate */
mov r0,#0x00
mov r5,#0x2000           /* dcache invalidate */
1:
mov r1,r0
orr r2,r0,#(1<<30)
orr r3,r0,#(2<<30)
orr r4,r0,#(3<<30)
mcr p15,0,r1,c7,c10,2
mcr p15,0,r2,c7,c10,2
mcr p15,0,r3,c7,c10,2
mcr p15,0,r4,c7,c10,2
add r0,r0,#0x20
cmp r0,r5
blt 1b
mrc p15,0,r0,c1,c0,0      /* icache off */
orr r0,r0,#0x1000         /* icache off */
eor r0,r0,#0x1000        /* icache off */
mcr p15,0,r0,c1,c0,0      /* icache off */
mrc p15,0,r0,c1,c0,0      /* mmu off */
orr r0,r0,#0x1          /* mmu off */
eor r0,r0,#0x1          /* mmu off */
mcr p15,0,r0,c1,c0,0      /* mmu off */
mrc p15,0,r0,c1,c0,0      /* dcache off */

orr r0,r0,#0x4           /* dcache off */
eor r0,r0,#0x4           /* dcache off */
mcr p15,0,r0,c1,c0,0     /* dcache off */
mov r0,#0
ldr r0,=0xFFFFFFFF
mcr p15,0,r0,c3,c0,0     /* set access domain */
ldr r0,=0x20270000
mcr p15,0,r0,c2,c0,0     /* set TTBR */
mov r1,#0x00000000       /* start virtual address */
mov r2,#0x1000          /* the number of descriptors */
1:
orr r3,r1,#0xc00         /* AP=11 */
orr r3,r3,#0x012        /* C=0 B=0 */
str r3,[r0,r1, lsr #18] /* set section descriptor */
mcr p15,0,r0,c7,c10,4    /* data sync barrier */
add r1,r1,#0x00100000
subs r2,r2,#1
bne 1b
mcr p15,0,r0,c8,c5,0     /* tlb invalidate */
mrc p15,0,r0,c1,c0,0     /* icache/dcache on */
orr r0,r0,#0x1000        /* icache/dcache on (I=1) */
orr r0,r0,#0x5          /* icache/dcache on (M=C=1) */
mcr p15,0,r0,c1,c0,0     /* icache/dcache on */
bx lr

```

ARMプロセッサの最大限の性能を引き出すには、キャッシュを動作させる必要があります。今回は、いよいよキャッシュを有効にします。

## キャッシュを有効にしてみる

### ● 手順

前回(第3回, 2015年3月号)までの知識があれば、命令キャッシュとデータ・キャッシュを使うことができるはずです。その手順を以下に示します。

- (1) MMUがOFF, データ・キャッシュがOFFの状態、MMU関連の設定を行う。
- (2) システム制御レジスタのMビット, Cビット, Iビットを1に設定する。

### ● アセンブラで手順を書く

これらの手順を示すアセンブラでのプログラムをリスト1に示します。アドレス変換にセクションを使

用し、仮想アドレスと物理アドレスが等しくなるように設定しています。0x00000000番地から0xFFFF0000番地で始まるセクションの設定をしますが、セクション・テーブルをプログラムで自動生成しています。これらのテーブルは、あらかじめメモリ上に格納しておきます。そのテーブルの先頭アドレス(物理アドレス)をTTBRに設定するのが普通ですが、テーブルがROMなどのライト不可能な領域にない場合(書き込み可能な場合)はプログラムで生成した方が簡単に思えます。

ここで、セクション・テーブルのセクション記述子ではC=0, B=0, つまり、全領域を非キャッシュに指定しています。こうしないと、U-Boot内で矛盾が起こる箇所があるらしく、ハングアップしてしまいます。

ところで、リスト1にはセクション・テーブルをメモリにライトした後、データ同期化バリアを実行しています。これは、ライト・バッファなど、CPU内に